

第11回原子力委員会定例会議議事録

1. 日 時 令和8年3月17日（火）14:00～15:11

2. 場 所 中央合同庁舎第8号館6階623会議室

3. 出席者 原子力委員会

上坂委員長、直井委員、吉橋委員、青砥参与、岡嶋参与、小笠原参与
内閣府原子力政策担当室
井出参事官、中島参事官、太田桐主査、黒木上席政策調査員

4. 議 題

- (1) 使用済燃料再処理・廃炉推進機構の使用済燃料再処理等実施中期計画の変更について
(見解)
- (2) アジア原子力協力フォーラム（FNCA）2025大臣級会合の結果報告について
- (3) 上坂原子力委員会委員長の海外出張報告
- (4) その他

5. 審議事項

(上坂委員長) 時間になりましたので、令和8年第11回原子力委員会定例会議を開催いたします。

本日は、青砥参与、岡嶋参与、小笠原参与に御出席いただいております。なお、岡嶋参与、小笠原参与はオンライン出席であります。

本日の議題ですが、一つ目が、使用済燃料再処理・廃炉推進機構の使用済燃料再処理等実施中期計画の変更について（見解）、二つ目が、アジア原子力協力フォーラム（FNCA）2025年大臣級会合の結果報告について、三つ目が、上坂原子力委員会委員長の海外出張報告、四つ目が、その他でございます。それでは事務局から説明をお願いいたします。

(井出参事官) それでは、一つ目の議題でございます。使用済燃料再処理・廃炉推進機構の使用済燃料再処理等実施中期計画の変更についての見解についてです。

こちらは経済産業大臣が使用済燃料再処理・廃炉推進機構NuROの使用済燃料再処理等

実施中期計画の変更について認可をするに当たり、原子力発電における使用済燃料の再処理等のための積立金の積立及び管理に関する法律の一部を改正する法律案に対する附帯決議を踏まえ、経済産業大臣より原子力委員会へ意見が求められたことによるものです。

令和8年3月10日に開催した第10回原子力委員会定例会議における資源エネルギー庁からの御説明を踏まえ、見解案を取りまとめました。

それでは中島参事官から御説明をお願いいたします。

(中島参事官) それでは、説明をさせていただきます。

先週、使用済燃料再処理・廃炉推進機構実施中期計画の変更につきまして、資源エネルギー庁の担当課長から御説明いただきました。経産大臣から原子力委員会としての意見を求められておりますので、事務局案について説明いたします。

資料1を御覧いただければと思います。最初のページは、上坂委員長から経済産業大臣宛てに意見を示す際の鏡の文書でございます。

1枚おめくりいただきまして、見解の案がございます。上の方から説明いたしますけれども。冒頭、以下のとおり、意見を示すとしまして、その後1行空けまして、最初のパラグラフでは、今回の計画の変更に関する経緯を記載しております。

その後続く四つのパラグラフでは、事実関係を整理した記載をしております。事実関係としましては、今般の中期実施計画では、2026年度から2028年度の3年間における実施場所、時期や量を記載されているとしまして、続くパラグラフにおきまして、実施場所である六ヶ所再処理施設とMOX燃料加工施設がいずれもIAEAの保障措置活動の対象になっていることを記載しております。

続いて、時期と量について記載をしております。再処理の計画につきましては、2026年度はゼロですが、2027年度に70トンの使用済燃料を再処理し、0.6トンのプルトニウムを回収すると。そして、2028年度に170トンの使用済燃料を再処理し、1.4トンのプルトニウムを回収する計画であると記載をしております。

続いて、MOX燃料の加工につきまして、2026年度から2028年度までの間ゼロの計画であることを記載しております。

その後、一方とあるところで、電気事業者の利用計画に言及をしております。フランスで加工されたMOX燃料集合体に含まれるプルトニウムを2026年度に0.7トン、2027年度に0.7トン利用する計画であり、2028年度の利用はゼロの計画であることを記載しております。

その上で、最後のパラグラフ、ページの1番下になりますけれども、そちらにおきまして、ここで事業者の説明によれば、六ヶ所再処理施設で回収されたプルトニウムは、MOX燃料加工施設における燃料加工を経て、発電所へ引き渡されるまでに4年程度を要する。その後、プルサーマル炉で照射・利用されるまで、プルトニウム保有量を一時的に増加させることとなるが、プルサーマルの着実な実施を通じ、将来的に同保有量が減少する見通しが示されることが重要であるとしております。

この部分につきましては、先般の電気事業者等のプルトニウム利用計画に対する見解でも同様の記載をしております。

1枚おめくりください。次のページになります。ここからは経産大臣に必要なかつ適切な指導を求める部分となります。①から④については、電気事業者等のプルトニウム利用計画に対する見解におきまして電気事業者に求めている内容であり、経済産業大臣には、これらについて必要なかつ適切な指導を頂く必要があることから、同様の内容を記載しております。

読み上げさせていただきます。

①では、再処理による回収を実際に進める際には、「我が国におけるプルトニウム利用計画の基本的な考え方」を踏まえ、プルトニウムの需給バランスを確保し、再処理から照射・利用するまでのプルトニウム保有量を必要最小限とし、六ヶ所再処理施設等の適切な運転に必要な水準まで減少させること。

②では、2027年度には六ヶ所再処理施設でのプルトニウムの回収が計画されていることから、2026年度に認可される実施中期計画における2027年度のプルトニウム回収量は、利用計画と整合した量として示されるべきである。このため、利用計画において、原燃の六ヶ所再処理施設及びMOX燃料加工施設の操業の見通しを立てられるよう、計画期間を設定すると共に、各所有者の所有量及び利用量を海外保管分と国内保管分に区別すること。

③では、電気事業者が保有するプルトニウムの国内保管分及び海外保管分、並びに新たに再処理により回収する分について、MOX燃料確保を実施するに当たっての考え方を整備し、利用計画と併せて公表すること。

④では、今後、具体的な取組の進捗に応じて、実施中期計画の見直しが必要となった場合には、速やかに行うこと。

最後の⑤ですが、六ヶ所再処理施設が2026年度、MOX燃料加工施設が2027年度中の竣工を計画していることから、これらの施設の安全かつ順調な操業に向けて、原燃は、安全確保を最優先に適切な工程管理を行うと共に、技術的知見の蓄積・承継に取り組むこと。

また、必要に応じて、電気事業者等は十分な技術的・人的支援を行うことと記載しております。

以上でございます。御審議よろしく願いいたします。

(上坂委員長) ありがとうございます。

それでは、ただいまの説明につきまして、15分間をめぐりに質疑を行います。直井委員からお願いします。

(直井委員) どうも中島参事官、御説明ありがとうございました。

先のプルトニウム利用計画に対する見解に沿ったものでありまして、特に文章等へのコメントはございません。

核燃料サイクルは国内で回り始めますので、原子力委員会としていたしましてもしっかりと確認をしていきたいというふうに思います。

私からは以上です。

(上坂委員長) 吉橋委員、お願いいたします。

(吉橋委員) 御説明ありがとうございました。

私の方からも、この文章に対する異論はございません。

ただ、最後の適切な指導をというところがございますけれども、今後、六ヶ所再処理施設が稼働し始めると、値なども変わってくることもあるかと思えます。そういったところを今後はしっかりと見ていく必要があると感じております。

私からは以上になります。

(上坂委員長) それでは、参与からも御質問や御意見を伺います。青砥参与から御意見を頂ければと思います。

(青砥参与) 御説明ありがとうございます。

説明の中にもありましたように、既に関連する電気事業者、日本原燃などから、プルトニウムの利用ですとか回収、あるいはそれを使ったMOX燃料の製造計画について説明を受け、その際、既に委員会としての見解を出しています。その見解内容、また更に、今後の関係するプルトニウム利用の状況等を踏まえ、大変適切な内容だと思えますので、私からも特にコメント等はありません。

(上坂委員長) 岡嶋参与からも御意見を頂ければと思います。聞こえますでしょうか。

(岡嶋参与) 岡嶋です。私の声は届いていますか。

(上坂委員長) 聞こえています。お願いします。

(岡嶋参与) 御説明どうもありがとうございました。

私の方からも、これまでにヒアリングをした内容に対するコメント等も加えた形で、項目の①から⑤という形で見解をまとめた形になっていると思っております。特に再処理工場は、操業を開始する頃になると、やはりきちんとしたそういう対応をしていただけたらと思いますので、こういう内容でいいかと思っております。

次年度以降、こういう点について我々も注意しながら、今後の計画等について考えていきたいと思えます。

私からは以上です。

(上坂委員長) 小笠原参与からも御意見を頂ければと思います。聞こえますでしょうか。

(小笠原参与) ありがとうございます。

まさに来年度2027年度から、六ヶ所再処理施設でのプルトニウムの回収が計画されているというこういう大きな局面の展開を迎えることになる訳ですので、プルトニウム利用に関する内外の透明性に対する要求というのは一層高まってきていると思えます。その意味で、昨年も原子力委員会、この同じ見解を出しておりますけれども、昨年度に比べても一層内容が濃くなっている。具体的かつ水準の高い注文をこの見解の中で示していると思えますが、それは適切なことだと思えます。

これを言い放しにせずに、やはり中で具体性を持った内容になっておりますので、きちんとフォローしていくことが、それが実施されることをフォローしていくことが重要ではないかと思えます。

1点質問なのですが、昨年もこの中期計画の変更に関して見解というものを原子力委員会で出しております。そのときに出された色々な注文というか要求ですね、これは適切にフォローされていると事務局の方ではお考えになっていらっしゃるのでしょうか。その点について確認させてください。

(中島参事官) それでは、中島の方からお答えいたします。

昨年は経済産業大臣に対する適切な指導を行うよう求めるということで、4点挙げております。一つ目ですけれども、これは基本的な考え方を踏まえまして、透明性を確保しつつ、国内施設で回収するプルトニウムの確実な利用と、プルトニウムの需給バランスを踏まえた再処理施設等の適切な運転の実現に向けて最大限の努力を行うことというのが一つでございます。

これにつきましては、プルトニウムの確実な利用を進めるという観点では、プルサーマル

炉を増やす取組、これを進めていく、事業者に進めてもらう必要があります。その点での経済産業大臣からの指導というのは、直接的には表には出てきておりませんが、これは特に地元の理解というのがプルサーマルを進めていく上で重要ですので、そういう観点で経済産業大臣というのは、しっかりと、地元に対しての働きかけというのをしているというふうに理解をしておりますし、また事業者に対しても、その推進を後押しするような働きかけをしているというふうに聞いております。

また、再処理施設の適切な運転の実現に向けて最大限の努力を行うことという部分がございまして、これについては目下規制委員会の審査を受けているという状況にありまして、これを可能な限り早く終わらせるということが重要になってくるかと思えます。

この点につきましては、電気事業者各社から、原燃に対して、審査対応の要員を派遣をして、この審査を極力短く、期間を短くしていくと、こういう取組が経済産業大臣の指導の下に行われているというふうに承知をしております。

そういった点から、この適切な指導を行うよう求めるということに対して経済産業大臣が適切に対応しているというふうに言えるかというふうに考えております。

また、こういった状況については、経済産業省の担当課を通じてその動向等を把握して、今回出します内容につきましても、しっかりとフォローしていきたいというふうに考えております。

中島からは以上です。

(小笠原参与) どうも詳細な御説明ありがとうございました。

私も昨年の見解から大きく乖離したような状況が発生しているとは思っておりませんが、今回の見解が非常にきちとした内容のものになっておりますので、是非これも今後1年にわたってきちんとフォローアップしていく重要性を指摘させていただきたいと思えます。

この見解自体は私は適切なものだと思います。どうもありがとうございました。

(上坂委員長) それでは最後に、上坂から意見を述べさせていただきます。

本見解は、基本的考え方で示した利用目的のないプルトニウムを持たないという原則、または、プルトニウム保有量を減少させる方針に沿った対応が図られるよう、経産大臣に必要かつ適切な指導をしていただく観点から意見を述べるものであります。

2027年度には、六ヶ所再処理施設においてプルトニウムの回収が始まる計画であります。六ヶ所で再処理を始めてからMOX燃料に加工され、原子力発電所に運び込まれるまでに4年程度を要することから、来年度の電気事業者のプルトニウム利用計画では、今後の見

通しを適切に示し、それと整合するように、実施中期計画が策定されることが必要となつてまいります。

また、国民の理解が得られるよう、プルトニウム利用の透明性を高め、核燃料サイクルについて丁寧な説明をすることも必要であります。

この見解はこうした点について、経産大臣から指導を頂くよう意見として明確に示したものでなっており、妥当なものと考えます。

本件につきまして、この内容で、原子力委員会の見解としたいと思いますが、よろしいでしょうか。

はい、御異議ないようですので、これを委員会の見解とすることといたします。

議題1は以上でございます。

次に、議題2について事務局から説明をお願いいたします。

(井出参事官) それでは、二つ目の議題でございます。アジア原子力協力フォーラム(FNCA)2025年大臣級会合の結果報告について、本日は事務局より説明し、その後質疑を行う予定です。

本件は、原子力利用に関する基本的考え方の3の3、国際潮流を踏まえた国内外での取組を進めるに主に関連するものです。

それでは、太田桐主査から説明をよろしくお願いいたします。

(太田桐主査) ありがとうございます。それでは、事務局より報告いたします。

アジア原子力協力フォーラム第26回大臣級会合等の結果について報告いたします。

アジア原子力協力フォーラム(FNCA)は、積極的な地域のパートナーシップを通じ、原子力技術の平和的で安全な利用を進め、社会経済的発展を促進することを目指す、日本が主導し、日本を含むアジア13か国が参画する国際的な研究開発協力の枠組みです。

主な取組としては、日本のプロジェクトリーダーを中心に各国の研究者との研究協力を促進、研究、意見交換等を実施し、現在8つの研究プロジェクトが推進されています。

その他、加盟国の代表がFNCAの1年間の活動成果や各国の原子力政策の最新状況の報告、次年度の活動方針の討議等を行う大臣級会合や、スタディ・パネル会合、コーディネーター会合等の活動を行っています。今回は、令和7年11月27日に東京で「原子力エネルギーの役割」をテーマに開催された第26回大臣級会合の結果について報告いたします。詳細、御手元の資料2に基づき報告いたします。

まず、開会セッションでは、上坂委員長の開会宣言の後、小野田内閣府特命担当大臣の歓

迎挨拶が行われました。小野田大臣は、各国に歓迎の意を伝えると共に、これまでの加盟国代表によるリーダーシップへの敬意を表し、また、本日のテーマに即し、実りある意見交換がなされること、1年間のFNCA活動の振り返りを基に今後の活動について活発な議論が行われることへの期待を述べました。最後に、アジア地域の原子力科学・技術の発展と共有が、アジア地域及び世界の発展に貢献していくことへの祈念が表されました。

セッション2、基調講演では、OECD/NEAマグウッド事務局長が「アジアにおける原子力エネルギーの役割」をテーマに基調講演を行いました。FNCA加盟国の多くが新規参入国として原子力発電の導入を検討している状況を踏まえ、欧州で先行する活発な取組などについて紹介しました。続いて、資源エネルギー庁より、日本の原子力発電に関するこれまでの経緯と実績、現在の我が国の原子力政策、また、原子力プロジェクトへの企業の協力状況等につき報告しました。

セッション3では、原子力技術全般に関する国別報告が、オーストラリア、バングラデシュ、カザフスタン、モンゴル、シンガポール、ベトナムの代表から発電・非発電の両分野での原子力技術動向について行われました。モンゴルからは、政府の2028年までのアクションプランの下、原子力法の改正や原子力庁の設立、原子力発電計画に関する基盤調査等の活動が行われていることが報告されました。今回の円卓会議の主題に沿って、バングラデシュ、カザフスタン、ベトナムなどからは、原子力発電所の建設計画の状況について説明がありました。ベトナムからは、原子力発電所開発プロジェクトが2024年末に再開され、最初に導入する技術として第3世代の新型軽水炉を検討していること、加えてSMR技術が国の重点開発項目の一つに位置づけられていること等が報告されました。

セッション4では、原子力エネルギーの役割に焦点を当てた国別報告が行われました。マレーシア、フィリピン、日本、韓国の代表からは、今回の大臣級会合のテーマである原子力エネルギーの役割に焦点を当てた国別報告がなされました。マレーシアからは、2050年までのカーボンニュートラル達成を目指し、将来のベースロード電源の一つとして原子力エネルギーを検討していること、フィリピンからは、低炭素社会の実現に向けて、SMR等の原子力発電も選択肢から外せないとの現状報告がありました。我が国は資源エネルギー庁より、GX基本戦略や、国内の原子力発電所の再稼働の状況、バックエンド、ファイナンス関係、SMRなどの国際的なプロジェクトの展開状況等について報告しました。

セッション5、円卓会議では、上坂委員長のセッション議長の下、今回の大臣級会合の主題である「原子力エネルギーの役割」のテーマに沿って、タイ及びインドネシアがそれぞれ

の原子力エネルギー政策や原子力発電導入に向けた計画についてリードスピーチを行いました。その後、前セッションの国別報告とリードスピーチを踏まえ、議論が交わされました。議論では、原子力発電の非導入国から日本や韓国のような導入国への質問が相次ぎ、加盟国の多くで原子力エネルギーの関心が勢いを増していることが感じられました。特に、人材育成や人材確保の観点からの質問が相次ぎ、それに対する回答として、幅広い世代に関心を持ってもらうためのアプローチ、人材確保の面から建設計画やプログラム立案の重要性、人材提供の可能性、日本で原子力分野の技術指導者を養成するコース等が紹介されました。オーストラリアを除き、今回参加した国からは、温度差は存在するものの、原子力発電の重要性が認識されていることが確認され、この分野での情報交換を継続していくことが確認されました。

セッション6では、FNCA賞授賞式及び記念講演が行われました。現在推進されているFNCAの8つの研究プロジェクトの2024年度の活動のうち、顕著な成果が認められた研究活動が表彰、紹介されました。今回は、最優秀チーム賞1チーム、優秀チーム賞4チームが紹介され、最優秀チーム賞に選出されたベトナムの研究炉利用プロジェクトの代表には上坂委員長から賞状及びトロフィーが授与され、代表者より記念講演が行われました。

セッション7では、玉田コーディネーターより、FNCAの活動報告として、令和7年2月に開催された第25回コーディネーター会合の概要が報告されました。また、事務局より今後の会合スケジュールが報告され、次回の第27回大臣級会合は日本で、第28回会合が韓国で開催される旨が確認されました。

セッション8では、今後のFNCA活動の方向性等を記載した本会合の成果文書、共同コミュニケ案が説明されました。共同コミュニケ案には、SMR等の次世代炉を含め、原子力発電に関する情報共有や技術面での情報交換を進めること、パブリックコミュニケーションに関するスタディ・パネルを2026年2月に開催すること、プロジェクト活動を通じ、FNCAが加盟国の農業、工業、医療、環境等の分野に引き続き貢献することが明記され、確認されました。また今回の共同コミュニケよりシンガポールが加盟国として追記され、本コミュニケには、今回の大臣級会合の参加した国による合意と明記されました。

事務局より説明は以上でございます。

(上坂委員長) ありがとうございます。

それでは、ただいまの説明に関しまして、2時50分までをめどに質疑を行いたいと思います。直井委員からよろしく申し上げます。

(直井委員) どうも太田桐さん、大変分かりやすく御報告いただきましてありがとうございます。

今回の大臣級会合は、アジア地域においても原子力エネルギーの導入に向けて前向きな検討が進む中、「原子力エネルギーの役割」をテーマに円卓会議を持ちました。原子力発電導入に当たって、人材確保、育成をどう進めるかといった課題や規制枠組みをどう構築していくか、国民の理解をどう醸成していくかなど、メンバー国が有する課題などを共有することができ、有意義な議論ができました。そしてこのような議論を継続していくということになりました。

F N C Aはこれまでのところ放射線利用に関わる共同研究プロジェクトがメインで、原子力エネルギーに関連したプロジェクトはなかった訳なのですが、メンバー国のニーズも踏まえて、どのような形で、原子力エネルギーに関連した課題の共有や協力がF N C Aの枠組みの中で行っていけるか、私自身も考えていきたいというふうに思いました。

私からは以上です。

(上坂委員長) それでは、吉橋委員、お願いいたします。

(吉橋委員) 太田桐様、御説明ありがとうございます。

今回参加させていただきまして、先ほど直井委員もおっしゃられたとおり、新規参入国が今後アジアでも増えてきて、その中で人材育成というのが非常に重要だなということを感じた次第です。日本においても現在原子力分野における人材育成というのが非常に問題になっておりますけれども、世界的に見ても重要な課題であって、そこにどうやって日本が関わっていくのかというのが今後の課題、我々の課題でもありますし、こういった会合でも、話し合われていくといいなと思っております。

特にこのセッション後の円卓会議の中でも、人材育成のところ若い世代や女性に原子力分野に関心を持ってもらうためのアプローチとありますけれども、各国でも女性技術者も増えております。日本においてもそういったところをどんどんアピールして、アジア諸国に対して、日本の有意なところを示していけたら良いなと思っております。

私からは以上になります。

(上坂委員長) それでは、参与からも御質問や御意見を伺います。青砥参与から御意見を頂ければと思います。

(青砥参与) 丁寧な御説明ありがとうございます。

御説明頂いた太田桐さんに一つ確認と、それから出席された皆さんどなたでもいいので、

お話を頂きたいと思います。

質問というか確認は、冒頭で、FNCAに参加するのは13か国とおっしゃいましたが、このメモでは12か国が出席ということになっていて、1か国が欠席なのですが、欠席された国はどこだったのでしょうか。

話の内容は非常によく分かったのですが、両委員からも話がありました中で、やはり確認したいのは、この地域で次第に非常に熱を帯びてきている原子力エネルギー利用について、状況というか、会議全体の雰囲気はどうだったかというところを、少し印象でもお話しただけると助かります。どなたでも結構です。よろしくお願いします。

(太田桐主査) 青砥参与、ありがとうございます。

最初の御質問に回答させていただきますと、今回、中国が不参加という形になりました。(上坂委員長) 二つ目の質問に関しまして、10ページ、11ページ見ていただきますとプログラムがある訳でございますが、これで、3アジアの加盟国代表から、全ての加盟国代表から、その国のエネルギー計画、原子力発電計画の説明がありました。そこで、多くの国々がSMR建設を2032年頃から計画するという説明がありました。それで、3ページの(3)の5ですかね、(5)の円卓会議でも1、2、3、4という重要な事項が挙がっておりますが、ここの中で、とある国の代表から、世界のサプライチェーン側は、アジア含めこの世界全体での計画の中にあるこの新規原発を本当に予定どおり造れるんですかというような、もうかなり切実な質問もきまして。正直我々も原子力人材育成といいますと、日本の中のサプライチェーンや人材育成ということを中心に考えていたのですけれども、今後は、こういう導入国の人材育成へのアシストも検討していかなければならないかと痛感した次第です。

また、2月10日の定例会議でも、日立GEベルノバがBWRX300の戦略の議題のときに、本件も報告しておきましたということで、非常に原子力エネルギーに対する熱い期待が各代表から説明があり、円卓会議で議論されたと、そういう状況でございます。

(青砥参与) どうもありがとうございます、委員長。そうした高まりを我が国は是非リードして良い議論に発展していただきたいと思いますので、今後もよろしくお願い致します。

私からは以上です。

(上坂委員長) それでは、岡嶋参与から御意見を頂ければと思います。

(岡嶋参与) 御説明どうもありがとうございました。

アジアの中で、こういう原子力に対する各国の開発状況あるいは今後どのような展望を持って進めようとしているのかというようなことについて、色々と情報を得ることができ

て良かったと思って聞いていました。

それで、特に円卓会議等のところでの問題の中に、人材育成や人材確保の観点からの質疑が相次いだということも書かれておりますし、これまで、委員とか、それから人材育成、我が国も含めて重要な課題の一つになっているということもおっしゃっていました。

セッション6のところ、FNCA賞の授賞式というのがあったと書かれていて、8つの研究プロジェクトの中から、特に2024年度の活動の中で顕著な成果が認められたというようなことが書かれていました。それらは、具体的にどんな成果というか、どんな研究テーマについてこういう成果が上がったのか、もし分かれば、その辺を教えていただければと思います。そういう受賞というようなことが一つのモチベーションとなって、更に人材の育成等々のところに有効に働くだらうと思いますので。

私からの質問は以上です。

(太田桐主査) 岡嶋参与、ありがとうございます。

人材育成の重要性ということで、御指摘いただいたとおり、こちらのFNCA賞は、各国でFNCA活動、ひいては各国の原子力分野の人材育成のモチベーションの一つとしても位置づけていただいていると各国からも伺っております。2024年度、5チームにFNCA賞、最優秀チーム賞、優秀チーム賞4チームという形で授与されましたが、この取組については今後も継続し、各国のFNCA支援活動、ひいては人材育成のモチベーションの一つとして位置づけていただければというふうに考えております。事務局より以上でございます。

(岡嶋参与) 御説明ありがとうございます。

多分FNCA8つの研究プロジェクト、例えば気象なんかも入っていたと思っているのですが、今回はそのどういう研究テーマが顕著な成績が認められたのかという具体的な内容を、もし今情報をお持ちでしたら、教えていただけたらと思うのですが。

(太田桐主査) ありがとうございます。詳細については別途回答させていただく形でもよろしいでしょうか。

(岡嶋参与) では、別途回答していただけるとのこと承知しました。今ここにある資料等ではちょっとフォローしきれなかったもので、よろしくお願ひします。回答は、是非、どのようなテーマのどのような内容で優秀とか、最優秀とかの顕著な成果が認められたのかを簡単に教えていただければ十分と思います。

私からは以上です。

(上坂委員長) それでは、小笠原参与からも御意見を頂ければと思います。聞こえますでしょ

うか。

(小笠原参与) はい。どうもありがとうございました。

この取組、今日御説明を伺いまして大変立派な取組で、特に日本のやはり国力が相対的に低下していく中で、日本が独自にこういったマルチのリーダーシップを外交的に発揮していくということはますます難しくなっていると思いますが、その中でむしろ発展していく方向にあるというふうに伺いましたので、まず、原子力委員長、原子力委員、それからそれを支えておられる内閣府の事務方の皆様に大いに敬意を表したいと思います。

特に、日本は例えば原子力外交の分野では、I A E A国際原子力機関の中でも、理事会の中で常任理事国的な立場を付与されています。それはやはり原子力の技術あるいは原子力の大国としての地位を認められて、そういう地位が与えられている訳ですが、こういったことはやっぱり当然視すべきではなくて、こういった日本がリーダーシップを国際的に原子力の分野で発揮していくということを継続することは非常に重要だと思いますので、その重要性を指摘させていただきたいと思います。

2点、期待と指摘をさせていただきたいと思います。一つは、今まではむしろ研究開発のフェーズがテーマの中心を占めていたというふうに伺いましたが、今回からは原子力エネルギーの方に更にこの活動のスコープが伸びていく可能性が出てきているということですので、是非このF N C Aのフォーラムの中では難しいと思いますが、日本の原子力産業界とこのF N C Aの参加される、非常に高いレベルで大きなステークを持った方々が参加してくださる訳ですから、そういったところで人脈をつくる、あるいはビジネスの機会に発展できるような機会をフリンジでつくっていただいたらいいのではないかとというふうに期待いたします。

それから、もう一つはメンバーシップの点ですが、先ほど中国が今回は参加国の中から欠席をしたというふうに御説明を受けましたが、これはやはり外交的に非常に意味のあることで、今後世界のサプライチェーンは色々な形で分断していくということが懸念されておりますけれども、そういったことを予感させるような動きではないかと思えます。

逆に、私ここに入っていないですが、もう一つの原子力大国であるアジアの国、インド、これをF N C Aの加盟国にするということは今検討に値するのではないかと思います。インド、パキスタンはN P Tに入っておりませんので、そういった原子力の資機材、技術の交換には、ある程度の制約がある訳でございますが、インドにつきましては国際的な原子力に関する不拡散の枠組みである原子力供給国グループでも、インドについては例外化するという決定が既に十数年前に取られておりますし、また日本としても日印原子力協力協定を二国間で結ん

でありますので、インドに対してはNPT非加盟国ですけれども、今後のサプライチェーンの再編成という過程を考えますと、一つ、その参加について検討する意義があると考えます。外交的な側面もございますので、外務省などとも相談されたいと思うんですけれども。このFNCA、中国がなかなか参加してくれないという状況が出てくるのであれば、インドの参加は、考えるに値するのではないかと思います。

特に回答を求めませんが、今の一つの期待とそれから指摘をさせていただきたいと思いません。

本当にすばらしい会合だと思います。皆様へおめでとうと申し上げたいと思います。

どうもありがとうございました。

(上坂委員長) それでは、上坂から意見を述べますが。

この大臣級会合は、アジアにおける原子力エネルギーの役割がメインテーマでありましたが、その後、今年の2月に行われましたFNCAのSP、スタディ・パネルでは、テーマは原子力の社会受容性でありました。まだ導入されていない国々の代表から積極的発表がありました。導入前からこのような真剣な取組があるということはすばらしいと思いましたが、またそこへ日本が自らの経験で貢献していくことが非常に重要なことと思いましたが、今後この原子力エネルギー、それから社会受容性がFNCAの重要なテーマになっていくと思いません。

またこのFNCAのいくつかの会議に前後しまして、マレーシア、インドネシア、フィリピンの原子力関係者の団体が日本を訪れました。関係機関を訪問し、原子力委員会も訪問して、特に我々のところでは、導入国での人材育成への協力ということが非常に重要なテーマでございました。

私からは以上でございます。

それでは、議題2は以上でございます。

次に、議題3について、事務局から説明をお願いいたします。

(井出参事官) それでは、三つ目の議題でございます。上坂原子力委員会委員長の海外出張報告について、本日は事務局より説明し、その後質疑を行う予定です。

本件は、原子力利用に関する基本的考え方の3の3、国際潮流を踏まえた国内外での取組を進めるに主に関連するものです。

それでは黒木上席政策調査員から御説明をお願いいたします。

(黒木調査員) ありがとうございます。

では、上坂委員長によります「第1回NEAグローバルフォーラム、原子力に関する教育・科学・技術及び政策」への出席について報告させていただきます。

昨年、令和7年9月29日から10月4日の日程で、米国ミシガン州アナーバーにありま
すミシガン大学にて開催されました、「原子力に関する教育・科学・技術及び政策に関する
NEAグローバルフォーラムの第1回シンポジウム」に上坂委員長が出席されました。

このシンポジウムは、OECD/NEAがミシガン大学の協力のもと開催したもので、主
催者であるOECD/NEAから、上坂委員長が招待され出席したものです。

本シンポジウムは、昨今の原子力エネルギーをめぐる国際的情勢の変遷や、それに伴う労
働力開発のニーズの増大を踏まえ、各国の産学官からのステークホルダーによる建設的な対
話を通じ、将来的な国際的規模での原子力分野の労働力の拡大に向けた原子力技術の教育と
訓練の強化のための方策を議論することを目的としておりました。

こちらのシンポジウムに随行した黒木から報告いたします。

このシンポジウムは、9月30日から10月2日の3日間にわたって開催されました。第
1日目は、上坂委員長は終日ミシガン大学の専攻長Todd Allen教授によるアレン
ジにより、ミシガン大学原子力工学専攻などの視察を行いました。それについては報告書に
も記載ございますが、後ほど上坂委員長より補足いただきます。

その日は、報告書3ページに写真がありますホールにて、グローバルフォーラムの各ワー
キンググループから活動の目的や成果について終日講義形式で説明があり、並行して別の部
屋では、原子力分野で活躍する若者たちによるポスターセッションが開かれておりました。
随行者として私はその講義を聴講いたしました。

2日目、3日目は、主にパネルディスカッション形式で多くのセッションが行われました。
全体の構成についても交えながら、上坂委員長の御出席部分を中心に報告させていただきます。

2日目、まずオープニングセッションでは、主催者であるミシガン大学とグローバルフォ
ーラムの議長から開催への謝辞や、このシンポジウムが特に若者にとって、ネットワーキン
グの場となることへの期待が述べられ、OECD/NEA事務局長のマグウッド氏より御挨拶
がありました。

次に、フレーミングセッションの基調パネルでは、シンポジウム開催地であるミシガン州
の原子力発電を取り巻く環境について、ミシガン州の行政や企業関係者によるパネルディス
カッションが行われました。

この次の、「世界の原子力の復興と社会の理解」と題したパネルディスカッションに上坂委員長が登壇されました。このパネルディスカッションには、米国アラスカ州上院議員の Cathy Giesel 氏も登壇されました。ルーマニアとケニアからのパネラーも登壇予定でしたが、あいにく都合により欠席でございました。

まず、Giesel 氏よりアラスカ州のエネルギー事情や原子力に対する州民の受容性などについて説明があった後、上坂委員長が日本の状況についてお話しされました。具体的には、東京電力福島第一原子力発電所の事故後、日本は事故から得られた教訓を生かし、新たに設立された原子力規制庁の下、原子力の安全とセキュリティを強化しており、その結果、その後事故は発生していないこと。また、近年の国際情勢の複雑化や AI などによる電力需要の高まりを背景に、再稼働、更には新規建設に前向きな流れがあり、大学、研究所、電力会社、産業界、そして政府が、国民の原子力に対する受容性向上のため大変努力している旨が伝えられました。

また、原子力リスクだけでなく、原子力利用のメリットについても強調し、エネルギーミックスにおいても、バランスの取れた政策を推奨していること、特に原子力委員会は、医療用アイソトープの国産化・利用の推進に関するアクションプランを策定していることが紹介されました。

また、本シンポジウムのメインテーマである原子力分野における若者を取り巻く状況についても説明されました。日本の大学では、原子力分野の教育や研究に力を入れており、福島の事故後も学生数はほぼ同じであることや、原子力分野は、経営、コミュニケーション、社会心理学、国際関係など、大変裾野が広がっていること。また、東京大学では、若いエンジニアが重要な国家資格を取得できるように教育する原子力専門職大学院を 20 年間運営していますが、更に電気技能や溶接などの国家資格を持つ若い技術者も必要であると考えていることが説明されました。

高校生の教育も大切で、昨年夏には OECD / NEA 主催のセミナーにおいて講演し、それに出席した高校生含め 13 名の高校生が原子力委員会を訪問したことなども紹介されました。

その後質疑応答が行われ、上坂委員長にも多くの質問が寄せられました。そのときの様子は、報告書にあります写真を御覧いただければと存じます。

質問は、例えば、「福島原発事故後、シャットダウンから再稼働や廃炉に向かっていった中で、労働力をどのように維持したのか」ですとか、「原子力に対する強い反対を経験し

たと思うが、廃棄物処理についてはどのように市民からの声に向き合っていくのか」など、福島を踏まえて、日本の原子力の復興や社会の受容性、労働力維持、教育などについて活発な質疑応答がございました。

この日はその後3つのセッションでパネルディスカッションが行われました。まず、「政府機関と国際機関の役割について」というセッションでは、このグローバルフォーラムの立ち上げや、米国のエネルギー政策の変遷、原子力業界の人材確保のための政府の戦略などについて、Fire Side Chatと言って、2名が壇上に上がり、一方がインタビューして自由に対談するという形で、3組の対談が行われました。

「産業界の視点」というセッションでは、電力研究所や電力業界関係者がディスカッション。クリーンエネルギーとして原子力発電の導入が各地で検討されているが、従来の火力発電から原子力への移行を進めるには強力なリーダーシップが必要で、また幅広い分野からの労働力とスキルの高い技術者の確保が大きな課題だといった旨が述べられました。

「若手専門家の視点」というセッションでは、NGOの代表や学生など5名の若手出席者がそれぞれの立場から原子力分野に入ったきっかけ、入る前と入った後の認識の違い、原子力分野の教育が進まない障壁、また、原子力分野に入っていた人が辞めずに関わり続けるためのアイデアなどについて話されました。

最終日の3日目には、初めに、「地域関係者の視点」というセッションで、NPO代表者やコンサルタント、研究者、市長、大学教授かつエンジニアという多様な立場のパネリストが原子力施設立地地域との関わり方についてディスカッションされました。

次の「大学関係者の視点」のセッションでは、原子力分野への大学の関わり方について討論が行われました。学問の発展には、国際的な協業が欠かせず、大学とはまさにその現場で、様々なバックグラウンドの人々が集まって研究や教育が行われる環境が守られなければならないといった意見が述べられました。

最後に、Tabletop Challengeというセッションがあり、これは国内レベル、国際的なレベルで、原子力分野の教育を強化するためにできることは何かというテーマについてグループに分かれてディスカッション、発表資料を作成し、最後に代表者がプレゼンを行うというものでした。このセッションに上坂委員長もメンバーとしてグループワークに参加し、そのときの様子が報告書の7ページにあります写真です。各グループが資料で提示したアイデアに対し、出席者から選ばれたジャッジが批判的な視点で質疑、グループ側が応答、その後ジャッジが受賞チームを選定するというもので、委員長の参加のグループは

Best Storyboard Awardを受賞しました。

最後、クローリングセッションでは、OECD/NEA事務局長のマグウッド氏から、改めて若者に向けてメッセージが述べられました。原子力の需要が歴史的に最も高まっている今、技術推進やリスクコミュニケーションが必要であり、世界の人々、特に貧しい地域の人々にエネルギーを届けることが究極的な目的であり、それを可能にする手段が原子力なのではないか。このシンポジウムで学んだことをどういった行動につなげられるかを考え、行動に移してほしいというようなお話でございました。

以上、上坂委員長の御登壇箇所やパネルディスカッションの内容を中心に、他のセッションの概要についても交えながら御説明いたしました。他にもMoment of Creativityとあって、原子力に関するクリエイティブな活動を紹介する時間があったり、期間中に参加者同士の会話を促す質問シートが配られるなど、非常に多くの多様なバックグラウンドをお持ちの出席者に対し、柔軟な発想や対話を有機的に促すような工夫が多々見られました。

所感となりますが、全体として、原子力分野に関わる若者を中心に据えて、国内外において様々な分野や人々の交流を促し、ネットワークを築き、新たな発想や化学反応を生み出す場とするというシンポジウムの意図が一貫して感じられる内容でございました。

特に、博士課程に在籍する学生や若手教員の参加が多く、本シンポジウムは彼らを対象としたメンタリングコースとしても狙いがあったようにも思われ、上坂委員長も若手参加者から多くの真摯で積極的な質問を受け、委員長の出席は講演者、パネリストのみとしてみならず、メンターの一人として大変意義深いものとなりました。

日本にはこのような層を対象とした教育の機会は見当たらず、教育プログラムの一例としても参考となるものでございました。

以上、私からの報告は以上です。

(上坂委員長) ありがとうございます。

言及もありましたので、私から少し補足させていただきます、まず、このシンポジウムの背景でございます。一昨年6月に東北大学とミシガン大学の合同原子力シンポジウムがありまして、私は基調講演をいたしました。そこでミシガン大学の原子力工学専攻長、2ページ目の一番上に書いてあります、Todd Allen先生と密にお話しすることができまして、その後このシンポジウムに招待を受けました。

また、2ページにありますように、初日に多くの先生方の研究所、研究室を訪問すること

ができ、議論することができました。ここで、真ん中辺にある、S a r a P o z z i先生ですね。この方は放射線計測が御専門ですが、昨年11月に横浜での国際会議に参加されて、原子力委員会にも来られました。また、彼女が副議長を務めるイタリアである科学技術広範の議論に関する国際会議も私は招待されております。

また、ミシガン大学の院生12名と先生2名がこの6月に来日されて、東北大学、東京大学でセミナーに参加し、原子力委員会も訪問されます。

それから、1日目のミシガン大学の専攻の見学についてです。御存知の方多いと思いますが、ミシガン大学原子力工学専攻はアメリカでもトップクラスであります。そこで3日間のうち、1日目に見学をセットいただきました。3日間シンポジウムに参加できたことは非常に有意義だったと思っております。

それからもう一点。3ページの写真の一番左のD u d e r s t a d t C e n t e rについてです。D u d e r s t a d t先生は、中性子工学の大御所の先生で、私のウィスコンシン大学院の先生の先生で、またミシガン大学では工学部長、それから学長も務められたすばらしい先生です。とても残念なことに、昨年この会議の前にお亡くなりになられたということで、非常に残念でございました。

私の補足は以上でございます。

では、直井委員からお願いいたします。

(直井委員) どうも、黒木様、大変分かりやすい御説明、ありがとうございます。

上坂委員長におかれましては、パネルディスカッションへの参加に加えて、グループワークへの参加など、今回のシンポジウムに大変な御貢献をされてこられ、お疲れさまでございました。議論を伺っていると、このシンポジウムにおいて大変大きな存在感を示されていたというふうに感じました。

それで1点ちょっと教えていただきたいのですが、3ページの国際研究センターに視察された際のところなのですけれども、今後の日本側の日米共同イベント等に協力してくれる可能性があるという御報告が記載されておりますけれども、これ何か具体的な想定がございましたら教えていただければと思います。

(上坂委員長) この国際研究センターですけれども、深澤先生は日本人でございます。国際研究センターはインターナショナルであるのですけれども、その中に日本研究部がありまして、それで深澤先生が中心であるということで。教員の方々数名で、ここに書いてあるような講義を実施されています。また非常にミシガン州アナーバー市が親日で、日本の文化にも造詣

があって、そういうイベントには参加者多数だということです。ミシガン大学にとどまらず、日本の大学と文化も含めて交流したいというふうにおっしゃられたので、今後そういう交流も科学技術に加えて検討したいと思います。

(直井委員) ありがとうございます。

私からは以上です。

(上坂委員長) 吉橋委員、お願いします。

(吉橋委員) 黒木様、御説明ありがとうございます。

また、上坂委員長、大変お疲れさまでございました。

今回この御報告をお聞かせいただいて、若者が、パネルディスカッションのところで日本の福島の原発事故の後をどうしていくのかであるとか、反対する方に対する反応はとか、廃棄物処理に関してと、多くの方が興味を持っていただいているのはとても素晴らしいことで、そういったところをどんどん発信できていくというのは大変よいことかなと思っております。

私からの御質問といたしますか、大変気になる場所といたしますのは、このミシガン大学の原子力工学専攻、こちらにどれぐらい女性の学生がいらっしゃるのかということと、あとは、今回のこのシンポジウムはどれぐらいの規模、人数が参加して、やはりその中でどれぐらい女性に関心を持っていただいているのかというところ、もし情報があれば教えていただければと思います。

(上坂委員長) 正確には覚えていないですけども、学部、大学院、各学年30名程度だったと思います。それで年によって変わるけれども、大体20%ぐらいは女子学生がいらしたかなと。それからまた、教員の先生方にも20%ぐらいいらしたかと思えます。ここでもPozzi先生は女性ですし、それから深澤先生、Barbara先生、3人女性なのです。ですので、20%ぐらいいらっしゃったかなと。シンポジウムの参加者もやはり20%はいた感じいたしますね。そんな感じですよ。

日本は今、原子力学会が5%から6%に上がったという段階です。医学系ですと20%ぐらいというふうに伺っているので、日本の原子力よりは高いかなという感じですかね。

(吉橋委員) ありがとうございます。20%も女性がいるというのはこれからの日本の課題でもあるなと思えます。日本では、どうしたらそれぐらい女性の方が興味を持ってくれるのだろう、どうしたら女性の教員も増えていくのだろうというところは大変興味のあるところがあります。またこういったシンポジウム等、お話をお聞かせ頂ければと思っております。よろしくをお願いします。

(上坂委員長) それでは、参与からも御質問、御意見を伺います。青砥参与から御意見を頂ければと思います。

(青砥参与) どうも御説明ありがとうございます。

いや、大変な会だなど、シンポジウムだなどという印象です。それに関連して少し確認させていただきたいのですが、第1回と書いてあるのが非常に気になるのですが、第1回というからには、この後に第2回、あるいは継続して何らかの動きがあるのかという点がまず知りたい。もし継続開催ができるとして、OECD/NEAがスポンサーシップを持っているとすると、この規模とは言いませんが、同様な会合は日本でできるようなポテンシャルについて、どのように考えたらいいか、お考えがあればよろしくお願いします。

(上坂委員長) 私もT o d d A l l e n先生から招待を受けて、その後リモート会議にも出て、プログラムがだんだんと送られてきたのです。始めは確定的なプログラムではない中で作り上げているなという印象で。だんだんとプログラムができてくると分かってきたことは、先ほど黒木さんが御説明したように、世界の若手の教員と大学院生を育成する会なのだなどという趣旨で。それをOECD/NEAが初めてミシガン大学で始めたのだなどということでありませぬ。

それで、実は今黒木さんが御説明したように、非常に若手にとっては素晴らしいプログラムでした。是非日本でもとOECD/NEAの事務の方に聞きましたところ、その場合はやはりミシガン大学のようなホストの大学が欲しいとおっしゃってしましてね。これも、日本の課題かなと思って。日本の主要なホストでこういう素晴らしいシンポジウムを日本の若手教員、院生も入れて世界の学生と一緒にやると、日本人若手にとってとてもいい教育の取組になるかなと思いますね。

(青砥参与) はい。道は非常に厳しそうですが、よろしくお願いします。ありがとうございました。私からは以上です。

(上坂委員長) それでは、岡嶋参与からも御意見を頂ければと思います。

(岡嶋参与) 黒木さん、どうも御説明ありがとうございました。

また、委員長どうもお疲れさまでした。

実は、ミシガン大学と聞いて私はとても懐かしく感じていました。というのも、委員長から御紹介のあったD u d e r s t a d tという先生は、委員長は中性子工学とおっしゃっていましたが、実はN u c l e a r R e a c t o r A n a l y s i sという本を書かれていて、1970年代終わりから80年代、原子炉物理の分野ではベストセラーの一つになって

いたと記憶しています。

それから、同じくミシガン大学には、Glenn Knollという教授もいらっしやって、その方は、確かRadiation Detection and Measurementという、我が国ではたしか「放射線計測のハンドブック」という分厚い本が出ていて、放射線計測の言わばバイブルのような本だったと記憶します。そういう両巨頭の教授陣がいらっしやるようなミシガン大学は、やはりアメリカでは原子力関係の教育をやっている大学としてはトップクラスだったということですし、また、今もこういう形で支えているんだなと思うと非常に心強く感じていました。

委員長にちょっとお伺いしたかったのは、このシンポジウム、アメリカを対象にしているとの理解でいいでしょうか。あるいはOECD/NEAが主催なので各国に呼びかけて、場所はアメリカですけれども、参加者は、多国にわたっていたのでしょうか。何名ぐらいが参加していたのかということも気になっているのですが、いかがですか。

(上坂委員長) 規模的には全体で100名強ぐらいで、それほど大きな会議ではなく、こじんまりして、かなりテーマを絞って、各人が密に議論するというタイプのシンポジウムで。そのうちの若手教員、大学院生が40名程度で、日本人は1名来ていましたが、東北大学から1名、若手研究員が来ました。世界から来ています。特にヨーロッパですね、原発新規導入のヨーロッパの国々が目立った、それから、アジアも目立ったように思います。

例えば、写真の中で、7ページですかね。私が行ったグループワークの中の5人は、一番左がこれベトナムの行政官の若手の方。それから、その右がBarbara先生で、座っていらっしやるのがSeoul National Universityの博士の学生さんですね。あと一番右端は東北大学の高橋先生ですけれども。

そういうことで、世界から若手とか大学院生を集めていましたが、やはりアメリカでもスタンフォード大学とかMITとかUCバークレーとかテキサスA&Mとか、原子力で有名な大学がいっぱいあります。ですので、私の印象は、正直世界全部というよりは、その中でミシガン大学と関係が深い大学や国々のところから、その40名くらい集めたのかなという印象であります。

もちろんOECD/NEAとしては今後、大学を変えて運営していくと思いますから、そういうことをして世界に広げていきたいのだと思います。

以上です。

(岡嶋参与) ありがとうございます。是非、今のお話を伺って、2回・3回と続けてやってい

ただ形にして、我が国でもこういう場を設けるようなことを積極的に取り組む必要があると強く印象を抱きました。是非その辺のところは、関係者の方にも働きかけてやっていただけたらと思いますので、是非よろしくお願ひしたいと思います。

私からは以上です。

(上坂委員長) それでは、小笠原参与、お願ひいたします。

(小笠原参与) どうも上坂委員長、大変な御活躍、御貢献で、大きな意義があったのではないかと思います。

私の方から、このシンポジウムを開催したこと自体、今の御説明を伺いまして非常に意義があったと思うのですが、OECD/NEAの主催の事業だというふうに理解しましたので、そのOECD/NEAにおけるちょっと位置づけについて伺いたしたいと思います。これは何かOECD/NEAにおける決議等に基づいて行われているのでしょうか、それとも事務局独自のイニシアティブで行われているのか。

また結果について、こういう会議を開きますと、政府間の会議ですと何か宣言をまとめるとか共同声明をまとめるとか、そういったものを成果物として採択したりする訳ですが、今回のこれは何かそういった意味でのOECD/NEAに提出するような成果物というようなものはあったのでしょうか。そこについて、参考に伺えればと思います。

(上坂委員長) 恐らく原子力の世界の大学の若手教員と大学院生ということを対象にした第1回目の会議なので、もちろんアニュアルレポートには書かれていくと思います。事務的などころは後でまた追って調べて御説明したいと思います。ファーストと書いてあるので、今後も続けていくのだと思うのですね。

かつ、黒木さん説明されましたように、若手教員の育成というのはとてもユニークな試みだと思いました。これは是非OECD/NEAを中心に今後も進めていただきたいなと思った次第であります。

以上です。

(小笠原参与) どうもありがとうございました。OECD/NEAがこういった会議を今委員長がおっしゃられたような趣旨で開催すること自体非常に大きな意義があったかと思ひますし、そこで委員長が非常な御貢献をされたということは日本全体にとっても非常に大きな意義があったのではないかと思います。どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。

(上坂委員長) 私から残りのコメントをさせていただきます。パネルディスカッションの様子が、4、5ページにあります。そこではもちろん福島事故からどのように教訓を学び、原子

力復興してきたか、原子力の安全を含め向上ですね、そういう質問もありました。

また、最近の日本の再稼働とか、海外でのSMR計画への参画とか。そういうことも皆さんよく知っています。どうしてそのように早く復興しているのだというような質問もありました。本当に世界が日本の原子力を見る目が変わってきているなということを感じた次第であります。

しっかりと原子力復興、それから人材育成、サプライチェーンの再構築をしなきゃいけないということを改めて認識した次第であります。

あとは、この5ページ目のグループワークでTabletop Challengeというのですが。それ以外にも黒木さんがおっしゃられていたように、ここにも書いてあります。色々なタイプのディスカッションの方法がありました。そういうことに是非日本の若手にも参加していただき、またそういうものをプログラムして行ってほしいなと思った次第であります。私は年齢的にこういうものは参加するのではないと思ったのですけれども、参加させられてしまいまして、最後は汗をかかせていただきました。

私からは以上でございますが、よろしいでございましょうね。

それでは、ありがとうございます。議題3は以上でございます。

次、議題4について、事務局から説明をお願いいたします。

(井出参事官) それでは、今後の会議予定について御案内いたします。

次回の定例会議につきましては、令和8年3月24日火曜日13時半から、場所が中央合同庁舎8号館6階623会議室、議題については調整中であり、原子力委員会ホームページなどによりお知らせをいたします。

以上です。

(上坂委員長) ありがとうございます。

その他、委員から何か御発言ございますでしょうか。

御発言がないようですので、これで本日の委員会を終了いたします。

お疲れさまでした。ありがとうございます。

—了—